

井上円了の生涯と思想をめぐって

田村晃祐

tanura koyu

第一節 円了の受けた学問

一 漢学

東洋大学の開創者井上円了（一八五八—一九一九）は、安政五年、越後国三島郡浦村（現、新潟県三島郡越路町）真宗大谷派慈光寺に住職井上円悟の長男として生まれた。明治元年（一八六八）数え十一歳、石黒忠恵（一八四五—一九四二）の漢学塾に学んだ。石黒は年譜（岩波文庫『懐旧九十年』）によると、十七歳（一八六二）で私塾を開き、十九歳で佐久間象山を訪ね、その足で江戸へ出て、慶応元年から四年まで江戸医学所に入學し、卒業の後医学所句読師となった。明治維新に際し一時帰国しているため、この時に習ったものであろう。円了の『仏教活論序論』にも「大政維新に際し一大変動を宗教の上に与え……：たちまち僧衣を脱して学を世間に求む。初めに儒学を修め」（『井上円了選集』第三卷三三六頁、一九八七、東洋大学）と記している。漢学塾は上級と下級に分かれ、その上級に円了（当時の名は襲常）がいた。円了について『懐旧九十年』には、

この級から出た者で……：一番世に知られたのが文学博士井上円了君です。円了は……：塾に通うたのは八・九歳の時からでした。この頃妻は襲常は他の子と異^{ちが}うところがありますから後日必ず大成しましょう、と言

って特に愛育したのですが、後年、果して世に知られたので、妻は大層喜びかつ誇っていました。……

ある朝大雪で、通学して来る者もなかったのですが、戸外にとんとん履物の雪を落す音がしました。妻はあれはきつと襲常です、といって戸を開けると、果して井上襲常でした。また、襲常が鼻緒の切れた下駄を下に提さげて来たことがありましたので、妻が何故鼻緒を立て直して来なかったかと問いますと、そんな事をしている時間が遅くなって、先生の講義を聞きはずすといけないから急いで跣はだし足でやって来ました、といいました。実に井上は子供の時分から学問に熱心で、心がけが他と異っておりました。(同書九一〜九二頁)

石黒は塾を二級に分け、円了の入った上級は医・僧または農家の子弟とし、経書・歴史・算数などを教えた。四書・五経の素読、『小学』『朱子家訓』『国史略』『日本外史』『政記』『十八史略』『元明史略』『古文真宝』『坤輿こんよ図誌』『明倫和歌集』その他算術・習字・剣道の型などで(同書五一頁)、円了自身の記した『履歴書』の中の漢籍の項には、これらの大部分を含み、石黒の上京に伴い、明治二年から長岡藩儒木村鈍叟について学び、明治六年までに『尚書』『文選』『唐詩選』『蒙求』『史記』『文章軌範』『世説』『荀子』など多数の漢籍を読んだことが記されている。

円了の幼時からの学問への情熱が見られる。なお、石黒は勤皇の志士となり、その後佐久間象山に会って、本当の攘夷とは外国に門戸を開き、外国の文化を摂取して、日本の学問をした上で西洋の学問をし、それぞれ一科の専門を究めなければならぬ、と教えられ、上京して医学を学んで陸軍軍医総監・日赤社長となり、後年に至るまで円了を援助した。円了も恐らくこの話を聞かされたことであろう。

二 洋学―長岡洋学校

明治維新は円了の十歳の時であったが、この前後、円了の近くに激動があった。その一つは戊辰戦争であり、

他の一つは廃仏毀釈である。

長岡藩は中立を志向し、河井継之助が官軍と交渉したが、官軍は了解せず、五月長岡城は攻撃、陥され、一旦奪回したが再び八月一日薩長軍に奪われ、藩主は仙台へ逃れ、長岡藩は七万四千石から二万四千石へと減禄された。

維新に際し、新政府の方針として神武天皇の古に返すことが布告され、神仏分離が強行された。政府方針は神と仏、神社と仏閣の習合を停めて分離し、神道を国教化していくことであったが、地方官吏の中には平田篤胤流の国学を奉じて廃仏毀釈を強行する者があらわれた。その先頭を切った所は佐渡であり、最も激しい処置を試みたのは富山藩であった。(圭室文雄『神佛分離』)

佐渡では、明治元年十二月、島内五百カ寺余りを八十カ寺に合寺し、特に真宗寺院は約五十カ寺を十四カ寺にするように布告された。真宗の僧には家族も居り、合寺は困難であった。強制されて請書を提出したものの、ひそかに島を出て大谷派の三条教務所へ訴える者が出て、事は宗派の問題となつて佐渡に止まらず、各宗からも口上書が提出され、太政官から明治三年「各管庁において区々の処置を致すまじく」と布告され、「廃仏の義に之なく」「強て合併致すべき御趣旨に意なく」と廃仏の方針は政府にはないことが明らかにされた。円了の慈光寺はこの三条教区に属する寺であった。富山藩では明治三年、各宗一寺とする令が出され、三百六十余カ寺を八カ寺とすることが強制され、布告の二、三日中に決行すべしとし、違反する者は厳罰に処することとし、兵を要所に伏せて、本山との連絡を絶つた。これも廃藩置県とともに沙汰止みとなつた。長岡の近くでも、「弥彦神社における神仏分離」「越後長岡蔵王堂神仏分離調査報告」「越後與板藩社僧復飾檀家合併の件」が『神仏分離史料』第四卷中部・北陸編(昭五八、名著出版復刊)に載せられている。

こうして円了は直接被害を受けることはなかったが、身近に長岡藩の戊辰戦争と維新の激動を見聞し、単に仏教だけでなく広く真理を求めて、世界の哲学・宗教の中に真理を求めて、仏教および中国哲学についての理解をもつだけでは不十分なものを感じ、英語を学んでキリスト教・西洋哲学の研究に入っていくことになった。十六歳で高山楽群社に入って洋学を学び始め、明治七年、新潟学校（旧長岡洋学校）に入学した。

長岡洋学校は戊辰戦争後、長岡を復興するには人材の養成が第一と考えた大参事・文武総督小林虎三郎が設立した学校で、明治三年、最初に国漢学校を設立した。従来であれば漢学の学校であろうが、そこに国文を加えているところが新しい時代の学校となっているのである。翌年、廃藩置県により国漢学校は自然廃校となった（長岡高等学校百年史）。ついで明治五年に長岡洋学校を設立し、英語教育を行うこととなった。小林虎三郎は、佐久間象山塾で吉田松陰（寅治郎）と並び称されて「二虎」とよばれ、塾頭代理をも務めてオランダ語のできた人であったが、新しい時代に適応するためには英語教育であるとして、旧長岡藩士で上京して慶応義塾に学び、教員となつて福沢の第二等にいた藤野善蔵を呼び戻した（因みに第一等は福沢を含め二名、第二等が三名であった）。藤野からは、この頃の教員給与は自分達でも月百円から百三、四十円くらい、との返事が来たが、長岡では十二カ月の契約で月百二十円で校長として招聘した（松本健一「われに万古の心あり幕末藩士小林虎三郎」には年俸と記すが『長岡高等学校百年史』にはグラビアの頁に月給の文書を載せる）。この学校設立にあたり、困窮していた長岡藩は、与藩三根山藩から藩士へと贈られた米百俵を藩士に分けずに学校建設の基金としたことが、山本有三の戯曲「米百俵」となっているが、これだけで足りるものではなかった。そのような中で藤野の俸給は破格のものであった。この学校の一日の授業は次のようなものであった。（次頁参照）翌年県の方針により新潟学校第一分校となった。

明治七年五月、すなわち設立後二年の学校に入った円了は、パーレーの万国史、ミッチェルの大地理書、クイケンブスの小米国史・大米国史、ピネノの文典、マルカムの英国史、グードリッチの仏国史・羅馬史の英書を読み、翌年も多くの書を読み算学（比例・小数・代数学その他）を学んでいる。明治九年には句読師（助教）となり、漢学の教師を務めた。六月に辞職して新潟英語学校に学び、十年（二十歳）には県知事の推薦で、京都の東本願寺教師教員英学生となった。

教科と時間割（火曜以下略）

月	曜日	時限	
算術稽古 (四組下等外)	大地理書	7.30	
		8.30	
		9.00	
		9.30	
		10.00	
		11.00	
	小地理書	第一リード	1.00
			2.00
		算術	3.00
			5.00

三 仏教—教師教員

円了の所属する真宗大谷派は佐幕派であったため、維新後苦難が続いた。その中であって人材養成に力を注いで発展の基礎としようとし、西欧の学問をとり入れて新しい時代に適応する人材の養成を図った。その方針が過激であるとして責任者が斬殺される事件まで生んだ。闍影院東瀛（空寛）は明治元年六十五歳で耶蘇教研究のため、護法場を高倉学寮内に設置し、また神道研究も行ったが、明治四年十月に、学寮の嗣講寮に押し入った刺客三名のために暗殺された。

大谷派は京都に大教校（貫練場）、各宗務出張所（教務所）の地に中教校を置き、その傘下に小教校を置いて、大谷派の教育網を設置し、その教師養成機関として京都に教師教校（毎月三円五十銭給付）を設置（明治八年七月二十二日）することとし条項が定められた。十八歳以上三十五歳以下の者二十五名を定員とし、三年卒業の後は中小教校の教師となる証書を提出し、カリキュラムが定められた。普通上・下等と専門に分かれていた。普通上・下等のカリキュラムは次の通りである。

教師 課 業 時 間 表

二七四九	宗 乘	余 乘	雑 科	梵 語 学	史 学 地 理	野 画 物 理	古 言 学	午前 自六時 至七時 四十五分	自八時 至九時 四十五分	自十時 至十時 四十五分	午後 自零時 至十分	自二時 至十分	自三時 至十分	自四時 至十五分
三三五十	宗 乘	余 乘	雑 科	政 法 学	詩 文 習 字 讀	算 法 博 物	因 明	自六時 至七時 四十五分	自八時 至九時 四十五分	自十時 至十時 四十五分	自零時 至十分	自二時 至十分	自三時 至十分	自四時 至十五分

〔配紙〕

こうして明治八年十二月に発足した。初年度は四十名の希望者があつたが、九名のみ入学許可された。

その後、教師教校の学科は専門・普通・英学・仏学の四科に分かれていたが、明治十一年二月に仏学科が廃止され、三科となった。

円了は明治十年七月、二十歳で教師教校英学科へ入学したとのことであるが、英語に関しても他の学科についても抜群の学力を保持していたのであろう、三年の卒業を待つまでもなく、明治十一年四月には東本願寺留学生として上京し、東京大学予備門、ついで東京大学の文学部哲学科へ入学した。

なお、円了が東京へ去った後のものであるが、参考までに英学科のカリキュラムを掲げておく。

教師教員英学科改定課業表

		等級	
宗	英学科	第一級	第二級
		第三級	第四級
英文和訳	代究文 理明 数書史	英文和訳	英文和訳
英文和訳	代究英 数理国 初歩書史	作文 文草 復軌 文範	作文 文草 復軌 文範
作文 文草 復軌 文範	応数近古 用学開代 算術平代 雑開立史 問立史	作日 文本 復外 文史	作日 文本 復外 文史
作日 文本 復外 文史	損数米万 益国国 算諸法史 法史史	作日 文本 復外 文史	作日 文本 復外 文史
作日 文本 復外 文史	比数万文 例国 諸法史典	作文 十八 復文 文略	作文 十八 復文 文略
作文 十八 復文 文略	分数文地第 数理二 諸理読 法學典書本		

〔配紙〕明治十一年四月

なお、東本願寺では明治八年教師教員と並んで育英教員（十学年）を京都に設け、宗内の俊英を育てることとした。円了の後に留學生に指名され、同じく東大哲学科を出て、哲学館最初の教員の一人となった徳永（清沢）満之は育英教員の出身者なので、そのカリキュラムを次に掲げておきたい。

これらから、東本願寺がいかに教育に情熱を注いだかが知られよう。語学としては英語・仏語のほか、サンスクリット・プラークリット・ベンガル語・ヒンズー語および比較言語学を行い、宗教としては天主教大意（カトリック）・耶蘇教大意・アメリカ新教大意・ユダヤ教大意・コーラン教・ギリシャ教大意・古エジプト教・古ギリシヤ教・古ローマ教・古ゲルマン教・ゼジュビット（古代ドイツ教・ゼントアヴェスタ（ソロアスター教）・四韋陀（インド・バラモン教）の十三種類に及び、どのようにして明治八年の時点でこれだけのものが教えられたのか疑うばかりである。

		外 部							内 部		育 英 乙 科 課 業 表
理 学	宗 教 学	政 法 学	数 学	印 度 学	仏 学	英 学	漢 学	国 学	余 宗	本 宗	
化 物 理 学	耶 蘇 教 大 意	経 自 由 之 理 通 解	代 数	プ ン ク リ ッ ト 文 法	横 文 書 牘 典	横 文 書 牘 典	時 古 支 那 文 文 対 策 法 言	公 阿 源 古 史 物 語 通 解	科 註 法 華 經 通 解	三 帖 和 讚 通 解	第 一 級
同 同	ゼ ジ ュ ビ ッ ト 大 意	第 二 憲 法 類 編 通 解	開 立 平 方 同 雑 問 問	動 詞 文 格 法	同 同	同 同	同 同 文 叙 事	公 万 令 葉 義 集 通 解	華 嚴 孔 目 章 通 解	仮 名 聖 教 通 解	第 二 級
同 同	米 利 堅 新 教 大 意	憲 法 類 編 通 解	必 求 用 積 雜 問 法	六 合 積	同 同	同 同	復 同 同 文	即 古 今 和 歌 集 通 解	成 唯 識 論 通 解	和 語 燈 録 通 解	第 三 級
物 理 学	古 埃 及 教 大 意	性 立 憲 法 政 体 略 輪 講	比 分 例 数 諸 諸 法 法	八 轉 聲	綴 單 語 字 篇	綴 單 語 字 篇	同 同 北 京 音	口 六 国 史 質 問	俱 舍 論 頌 疏 通 解	御 本 文 通 素 読 解	第 四 級
物 理 階 梯	古 希 臘 教 大 意	改 定 律 例 輪 読	加 諸 等 諸 應 用 法	連 聲 法	同 同	同 同	時 同 文	公 皇 大 日 本 朝 史 略 輪 読	唯 七 十 五 頌 法 通 解	七 祖 聖 教 素 読 解	第 五 級
同	古 日 耳 曼 教 大 意	新 律 綱 領 輪 読	加 減 乘 除 法	摩 多 体 文	同 同	同 同	同 同	綴 日 本 外 史 素 読	観 心 覚 夢 鈔 素 読	三 經 訓 読	第 六 級

四 西洋哲学

東大予備門へは明治十一年九月に入学し、明治十四年九月に二十四歳で東京大学文学部哲学科へ入学した。予備門時代の円了について、宮本正尊博士は次のように述べている。但し、『東洋大学百年史』通史編Ⅰ（一九九三年、東洋大学）四〇―四二頁の予備門の教員表によれば、これは大学の方であつたのではないかと思われる。

……十一年九月、円了が予備門に入った時、幸にしてその八月、ハーバード大学出身で、弱冠二十六歳の青年哲学者、アーネスト・フェノロサ E. F. Fenollosa が外人講師として来任した。円了はその教養として、孔孟・老荘・諸子を通じての「漢学」と、確かな英語による読書によって洋学の知識を持っていた。ここでフェロノサによつて、さらにミルの経験と実証、スペンサーの不可知論、コントの実証的な社会論と創造的な人道論、ソクラテスの無我中道的な実践哲学、カントの理性 Vernunft と悟性 Verstand による批判的であるが、その底に人間の道徳的実践からにじみ出る無執の科学性が円了のどこかに滲みこむものがあつた。

〔明治仏教の思潮〕佼成出版社、昭和五十年三月、二六七頁）

東京大学哲学科へは明治十四年九月に二十四歳で入学し、西洋哲学をフェノロサ、東洋哲学を井上哲次郎・原担山・吉谷寛寿等から習つた。明治十八年七月に二十八歳で卒業。在学中、カント・ヘーゲル・コント等の研究会（哲学研究会）を開いて学友とともに研鑽に励み、大学内に文学会を組織して毎月集会を行い、さらに哲学会を組織し、発会式には加藤弘之・西周・西村茂樹・原担山・島地黙雷・大内青巒など当時の代表的哲学者仏教者が入会するなど、大きな活躍をした。学士号授与式では総代を務めた。

第二節 結婚

明治十九年十一月、金沢藩医吉田淳一郎氏の娘敬（一八六二—一九五二）と結婚した。敬は東京女高師出身で当時最高の女子教育を受け、東洋英和女学校その他で英語の教師をし、目賀田男爵の仲人（同氏夫人が敬の親友であったため）で円了と結婚した。

敬の曾祖父に吉田長淑（一七七九—一八二四）がいた。幕府医官蘭学の桂川甫周に入門、日本最初の蘭方の内科医となり、金沢藩の御典医となった。金沢藩主が金沢で病にたおれ、江戸から呼び戻され、途中病にかかりながら金沢へ赴き、金沢で死去した。そのため、墓が金沢の曹洞宗棟岳寺にあり、円了は大正二年五月二十四日、金沢を訪れた際に墓参している（『巡講日誌』）。現在も本堂前の中央に立派な墓が残っており、棟岳寺では長淑を記念して平成十二年十一月、日蘭交流物故者法要を行い、金沢オランダ友好協会を発足させた。長淑の子孫を探していたところ、井上家がそれに当たることが分かり、平成十四年の墓前祭にはお孫さんに当たる井上民雄氏が出席された。

なお、文京区の養源寺に吉田家の墓所があり、長淑の碑が建てられている。

第三節 哲学館開創

一 哲学館開設の意図

円了は東大卒業に際し、二つの就職の機会があった。一つは教師教校へ入る時、将来教校で働く旨の誓約をしていたはずであり、なおその上、東京へ留学までさせてくれた大谷派から教校の教師になるよう要求されたのに従うことであり、他の一つは幼少時の漢学の師石黒忠恵が、文部大臣森有礼に話しておいたから文部省へ入るよ

うにとのすすめであった。ところが仏教に真理性を見出し、仏教の衰退を嘆き、日本仏教全体の振興のために働くことを決意していた円了は両方とも断り、仏教の外護者をもって任じ、大谷派の承諾も得た。

こうして一方では活発な著作活動を始め、『仏教活論序論』を著して仏教を活発化させるべき所以を述べ、『哲学一夕話』等の著作をなして、哲学・仏教の普及につとめた。

他の大きな活動は哲学館の設立である。

円了の哲学館開館の趣旨は、哲学は学問中の中央政府で、諸種の学問中最も高等に位するもので、高等の学問によって高等の智力を発達し、高等の開明に進向するものであるとしている。日本を高等の開明に進ませるのが最終の目的であり、このため、東大では外国人教師が外国語で講義していたのと異なり、日本語で講義させ、一年の普通科・二年の高等科を合わせて三年で一応の知識を得させるのを目的とした。

非常な人気をよび、当初五十名とした定員を約三倍（百四十五名）にせざるを得なかった。円了は純正哲学を講じ、後に真宗大学学監となり雑誌『精神界』を発刊して現在に至るまで大きな影響を与えた徳永（清沢）満之は心理学、後に東大印度哲学科初代教授・大谷大学長・学士院会員となった村上専精が仏教学、日本初の本格的仏教大辞典を大正六年（一九一七）に刊行し、発刊後約九十年の現在に至るまでなお刊行が続けられている生田（織田）得能が仏教史を担当した。円了は、発足に当たって南北朝作の智慧の菩薩文殊像を贈った勝海舟・帝大総長加藤弘之・東本願寺の東京留学生の一人寺田福寿を三恩人としている。

円了は哲学館において、教員と正しい思想信仰をもった仏教者を育てることを目的とした。円了によれば、明治維新後、日本は制度的には近代化されてきたけれども本当の近代化は人心の近代化にある。民衆が古代的迷信にとらわれていれば、制度的に近代化されても本当の近代化は達成できない。その近代化の方法として、近代的

合理的精神を身につけ、諸学の根本にして最も高等なる学問である哲学を身につけた教員を養成することにより、その教員によって育てられた人々は、近代的合理的精神を身につけた近代国家の基礎を形成する役割を担う人となるであろう。

第二に、古代的非合理的思维の最たるものは迷信である。そこで円了は迷信の実体を調査し、そのいわれなきことを証するため、東大卒業直後に不思議研究会を組織し、『妖怪学講義』を著し、『迷信と宗教』（至誠堂書店、大正五年）を発刊した。例えば鬼門について、中国の古典『海外経』に、東海の中に山あり三千里にわたる桃の木があつて万鬼の集まる東北の門がある、というのが根源であろうし、今地球上にこのような島がないことは確認されても、鬼門の迷信はなくなならない。それはこれが一種の宗教的信念になっているからで、宗教的迷信を除去するのは正しい宗教によらなければできないと考える。円了が正しい道理に裏づけられた宗教者を育てようとしたのは、こうして日本の近代化を促進し達成するためであつた。

二 哲学館事件

明治三十五年十月、教育部第一科（倫理科）の試験に文部省視察官隅本有尚等が臨監し、中島徳蔵の倫理学説の試験の答案の中に、

人は彼が予知せざりし結果に対しては……責任ありと云ふを得ず。且又単に彼の志向たるに止りて動機ならざりし結果の部分を見て之に善悪の判断を下すべきものにあらず。否らずんば自由の為に弑虐をなす者も賞罰せらるべく……

という答案を見て、天皇弑逆を肯定する文であるとし、教師がこのような内容の教科書に何の意見も加えずに講義したことを責めて、不穩な倫理説を教授しているものとし、その試験を受けた三名の教員免許状の許可を取り

消し、哲学館の教員免許証の無試験検定許可も取り消され、哲学館に大きな打撃を与えた。

なお、中島の倫理学説は動機も結果も善なる時、善なる行為といわれるというものである。

この事件の本質は、私見をもつてすれば、近代的合理的国家建設を志向する哲学館の教育方針が、神武天皇の創業の昔に帰し、神道国教化を強行して天皇神格化を推進する文部省の国体観念との衝突であったのではないかと思われる。

中島はこの事件の三年前、明治三十二年に出版した『倫理学講義』（六月初版、十一月再版、富山房）で、国君の命令も善であれば我々は従う義務がある、と説いている。国君という語は外国の君主を含むものであろうが、日本の天皇も含めて考えられよう。

……要するに政治上、国君の命令する所、及び宗教上神の命令する所でありましても、其国君が強大なる力、陸海軍の力と云ふものを以て我に臨み、又神が有りとはゆるる天然の力を以て、或る事を我に命令し給ふても、其力の大なるがために、我は道徳上それに服従する義務はない、唯其命令が善であるならば、始めて我々は是に従はねばならぬこととなるのであるから、他律の道徳説は要領を得ないのです。譬へば三つ兎であろうが、眇たる一個人であろうが、其命令にして善ならば、道徳上是に従ふの義務がある。けれども、其命令が悪なれば、私がよし国君のために若くは又神のために殺されやうとも、私は道徳上是に服従するの義務がないと云ふことが、我々の道徳的意識に照して最も明白なる事実であります。（同書一八七頁）

このような天皇観が文部省の立場と相反することは明らかであろう。中島は極力辞退したにもかかわらず、この二年前に文部省の修身教科書の起草委員に任ぜられたが、小学生の修身教科書は天皇観・国家神道を国民全体に徹底する手段として用いられ（村上重良『国家神道』）たものであるにかかわらず、中島は「智仁勇」の徳目を

中心に据えようとし、「修身ハ教育勅語ノ旨趣ニ基ツキテ児童ノ徳性ヲ涵養シ道徳ノ実践ヲ指導スルヲ以テ旨トナス」という委員が多く、対立した。「教育勅語は前段で記紀神話を前提とする肇国の由来と「国家の精華」とを説き、「教育の淵源」がここにあるとする。」（『国史大辞典』吉川弘文館）。中島による教育勅語批判がなされたであろうといわれており、翌年起草委員を辞任して哲学館に復帰したが、実際には「文部省編纂委員を免ぜられた」とする報道もあり（『東洋大学百年史』通史編Ⅰ、第七章哲学館事件）、ここに文部省対中島徳造の思想的対立は明らかとなり、ひいてはこのような教師によって育てられた学生に教育をまかせられないとする文部省方針となつたものではないかと考えられる。

因みに、太平洋戦争敗戦前の小学校教科書では国史の教科書も、第一 天照大神 第二 神武天皇 第三 日本武尊 と神話を歴史的事実として扱い、文部省が編纂した戦争遂行の書『国体の本義』（昭和十二年初版）では「第一 大日本国体」に、

大日本帝国は、万世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である。而してこの大義に基づき、一大家族国家として億兆一心聖旨を奉体して、克く忠孝の美德を發揮する。これ、我が国体の精華とするところである。（九頁）

と神話に基づく天皇を中心とする国体の永遠性が謳われている。これに関連してみられるかと思われる円了の考え方を挙げれば、地球が生成から最後滅亡に至る星の一つである以上、その上にある国家もまた無常なものである、というのである。（『哲学新案』『井上円了選集』一巻、二九三頁）

第四節 社会的活動

一 雑誌『日本人』

明治二十一年四月、雑誌『日本人』第一号が発刊された。これは加賀秀一・島地黙雷・辰巳小次郎・三宅雄二郎・井上円了・志賀重昂ら十一名で政教社を結成し、「今や眼前ニ切迫スル最重最大ノ問題ハ蓋シ日本人民ノ意匠ト日本国土ニ存在スル万般ノ困外物トニ恰好スル宗教、教育、美術、政治、生産ノ制度ヲ選択シ以テ日本人民ガ現在未来ノ嚮背ヲ裁断スル哉」（第一号表紙裏）と宣言し、第一号は僅か本文三十頁の小冊子にすぎないが、かなり好評で三版まで出ていたようである。一部定価六錢五厘、毎月三日と十八日の二号発売であった。円了は第一号に「日本宗教論緒言」を載せ、第四号にその一、第六号にその二、以下その五まで続いている。

この雑誌の目的とする生産の制度に関するものであろうが、六月十八日発売の第六号に面白い記事がある。「高島炭鉱の惨状」と題し、松岡好一が九州の高島炭鉱へ行き、坑夫とともに坑内へ入りその実状を調査したところ、坑夫の就業時間は十二時間で、採炭した石炭を十五、六貫乃至二十貫を這うようにして運ぶ。小頭（下級管理職）は青鬼赤鬼のようで、坑夫を棍棒で殴打し、あるいは後ろ手に縛り梁上につり上げて足と地を咫尺するに及んで打撃を加える、などの実状を報告している。この記事は、明治前半期最大の労働問題事件であった、いわゆる高島炭坑事件を引き起こした。「事件の展開は第一期（明治二十年十一月ごろより二十一年五月ごろまで）『福陵新報』をはじめとする関西以西での報道の時）、第二期（二十一年六月より九月中ごろまで）『日本人』によつてはじめて問題が中央に提起され、有力雑誌のほとんどが取り上げ、……大きな社会問題に発展し、ついに政府が現地視察を行い、三菱に改善勧告を出し……」（『国史大辞典』第九卷、吉川弘文館）ということにまで発展した。

このような記事をも載せる雑誌であった。

二 講演活動

こうして円了は一方では次節で説くように体系的哲思想家であるとともに、日本の近代化を促進し、迷信を除去する啓蒙思想家としての仕事を始めた。哲学館事件の際は外遊中であった円了は翌年帰国、哲学館を哲学館大学と改称し、修身教会設立趣意書を配り、中野区江古田に哲学堂を建立し、釈迦・孔子・ソクラテス・カントの四聖を祀った。

円了は直接日本全国を巡講し、講演会を催して民衆に働きかけ、啓蒙の実をあげようとした。この巡講は三浦節夫氏によると、『井上円了選集』一五巻、四四三頁以下)、明治二十二年三十二歳の時に始められ、後半生の延べ二十七年間に及ぶもので、明治三十九年哲学館大学長引退の後後二期に分けられ、円了自身、前期を「館主巡回日記」とよび、後期は「紀行」「巡講日誌」としている。巡講総日数は三千百八十七日、四十四県九十三市区三島二千九百六十二町村に及び、巡講した所を平成七年の市町村に比較すると、その五三% (三府一道四十三県) に当たるとのことである。

宮本正尊博士の推計によると、明治四十年から大正六年までの十一年間の講席は四千七百五席であり、明治二十三年から三十九年までの十七年間の講席は約二千四百三十八席となり、合計七千四百三十三席であり、聴講者数を平均五百人とすれば二百八十五万七千二百人乃至三百五十七万一千五百人にのぼる(『明治仏教の思潮』二六四―二六五頁) という。膨大な数の民衆に直接語りかけた努力にも驚かされるが、これだけの数の講席を用意した哲学館卒業生達の熱意にも驚かされるものがある。このような巡講を行った理由として、①蓮門教会の島村ミツが三十年伝道し数百千の信者を得たこと、②川の中の大石は洪水の度に逆に川上へ上っていくこと「大石は逆流に遡り、大人は逆運に上る。」、③弘法大師のように上層社会ばかりでなく地方人民のためにも尽くしたい、と考

えたことがあげられる。謝金は哲学館の基本金とした。講演の内容は「国民道德の普及の旨趣の外に教育、宗教、倫理道德、妖怪学、旅行談、等」であつた。その講題の中には教育勅語や戊申詔書などの解説が含まれている。円了は外国へも講演旅行を行い、最後は大正八年六月六日、中国大連の本願寺附属幼稚園で講演中、脳溢血にたおれ、東本願寺別院で急逝した。

第五節 思想

一 中道の論理

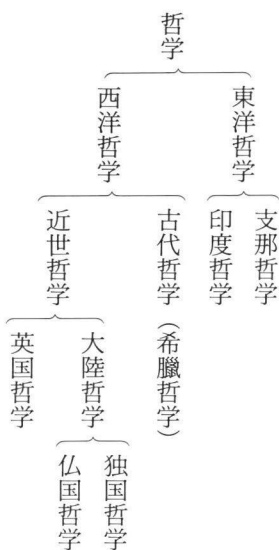
明治十九年七月、二十九歳で円了は『哲学一夕話』を刊行し、思想の基底を形成した。哲学を究理の学問と規定し、無形の心性に属する学問とする。唯物の面から見ればすべては唯物に見え、唯心の立場から見ればすべては唯心に見えるが、唯物も唯心も一方的な片寄つた見解であるに過ぎず、非物非心の理を本としなければならず、唯理論にしても物心を含み、「相離れざるもその別なきにあらず、これを哲理の中道とす」と述べて、物と心、理と現象（物心）の中道に真理の存することを主張している（『井上円了選集』一卷、三五頁）。「差別中に無差別を有し、無差別中に差別を有して、差別すなわち無差別、無差別また差別」（『井上円了選集』一卷、四四頁）の道理である。この哲理の中道は、太極（易）、真如（仏説）、無名真宰（老莊）、本質（スピノザ）、自覚（カント）、絶対理想（ヘーゲル）、不可知的（スペンサー）と、古今東西に通ずる哲理を合したる名称（『井上円了選集』一卷、四八頁）である。神の本体もまた有神論と無神論の一方に僻するを排して、「存するがごとくしてかえつて存せず、存せざるがごとくしてかえつて存するもの」（『井上円了選集』一卷、五〇頁）と立てるところに哲理の中道がありとし、真理の性質もまた、「もし純全中正の標準を論立せんと欲せば、物心内外の中道をとらざるべ

からず」(『井上円了選集』一巻、六八頁)と中道の標準を開示している。これは『仏教活論序論』で示した中道説(『井上円了選集』三巻、三六二頁)をより精密化したものである。

二 世界哲学の構想と『外道哲学』

円了は明治十九年九月『哲学要領』(前編、明治二十年四月後編)を刊行し、世界の主要な哲学についての叙述を試みた。序に「古今東西の哲学を列叙対照し、読者をしてたやすく哲学全系の大綱要領を知らしむべしと信ず」(『井上円了選集』一巻、八七頁)という。

その範囲として次の分類を挙げる。



(『哲学要領』前編、四聖堂、七頁。『井上円了選集』一巻、九二頁の図は誤り)

このうちインド哲学は第十五節史論、第十六節比考、第十七節種類、第十八節婆羅教、第十九節釈迦教の五節に分けて説いているけれども全体で僅か四頁半にすぎず、とにかく挙げてはある、という程度に止まる。支那哲学も僅か四頁に止っている。

後半には哲学概説が記されており、その主題は『哲学一夕話』に通ずる。

円了の経歴からすれば、シナ哲学はすでに新潟学校で助教を務めたほどの実力をもち、仏教哲学、特に西洋哲学は専門に学んだので、最も不十分なのはインド哲学であつたであろう。そこで漢訳の仏典および漢訳のインド哲学論書に資料は限定されるものの、膨大な資料を収集して、『外道哲学』は明治二十九年十一月下旬に着手され、三十年二月に刊行されたものである。円了自身はこれを日本仏教研究の十五篇の第一篇として著作したもので、従つて仏教研究のための入門的意味をもつて著作されたものとされている。

こうしてこの書は、一面インド哲学自体の研究書であると見られるが、この点からいえば、現在のインド哲学研究はサンスクリット語の研究による原典研究が主流であるのに対して漢訳のみの資料では、それなりの意味はもち得るものの価値は限定されたものとなろう。しかし、他方、円了自身が意図したように、漢訳仏典の理解のためのものとしてみれば、漢訳の仏教論書の多くはインド哲学への批判を含んでその内容の理解に不可欠のものであり、著述後百年近く経っている現在にあつてもなおその価値を有する著作であろう。

円了はまた中学の教科書として『印度哲学綱要』を明治三十一年に発刊している（『井上円了選集』七巻）。

三 重重無尽の相含と科学の受容

円了の哲学思想の到達点を示すものは『哲学新案』（明治四十二年）であり、ここではすべての物・思想が矛盾するように見えて実は相含む関係にあつて一体のもので、無限に重なり合つて一如の世界を形成しているものと見ている。これを仏教の見地から見ると、「一即一切・一切即一・重重無尽」を説く華嚴教学の現代化のように見える。

星は地球を含めて生成から滅亡に向かうもので、地球が滅亡する以上、すべてのものが無限の進化を遂げるこ

とはあり得ず、進化あれば退化あり、物質と勢（エネルギー）は相含むもので、現実の世界を見るも、物と心は互いに相含んで一体不二のものであり、現象と本質は一体であり、心界についてみても、有限性の知・情・意と無限性の理性・信性また一体不二で、宇宙はこうして無限に相含し合つて一如の世界を形成し、絶対的立場からみると、心に有限性と無限性が一体化され、生死即涅槃で、生死は迷妄の世界でありながら、そのまま生死を超えた一如の世界に住することができるとする。

四 仏教の中道

円了は仏教についても数多くの著作を行っているが、その中の『日本仏教』について概観していきたい。これは教育家は仏教を知る必要がある、という立場で、分かりやすく入門書として書かれたものである。そして仏教全体を概観しながら日本仏教の特質に及んだものである。

第一、小乗哲学門

婆羅門教から始めて小乗説一切有部俱舍宗の教義に及ぶ

第二、権大乘哲学門 唯識法相宗の教義

三論宗の中道思想

第三、実大乘宗

天台宗・起信論

華嚴宗・真言宗

大乘を有宗、権大乘を空宗、実大乘を中道宗とする（『井上円了選集』六巻、七四頁）

第四、實際宗 以上を理論宗とし、鎌倉仏教を実際宗とす

禅宗

浄土宗・真宗・融通念仏宗・時宗

實際宗については、他に『真宗哲学序論』（明治二十五年初版）、『禪宗哲学序論』（明治二十六年初版）、『日宗哲学序論』（明治二十八年初版）の三著がある。『真宗哲学序論』では先ず哲学原理論をあげて、二様並存一体両面の真理としての中道思想を掲げ、仏教原理論として天台・華嚴・真言等の中道説を挙げ、天台宗は平等の上に理論を立てながら差別の上に實際を立て、日蓮宗は平等の上に實際を説き、禪宗は中道の真理に基づいて心の本体を真如の理性とし、浄土門は客観上に成仏を立て（『井上円了選集』六卷、二二二頁）、理論上の差別論と實際上の平等論、表面は感情にして裏面は智力という、それぞれ両面を表裏に含んで中道となっている。

（表面）（裏面）

<p>第一</p> <p>（故に）浄土門</p>	<p>聖道門 平等 + 差別</p> <p> 差別 + 平等</p> <p> 聖道門</p>	<p>第二</p> <p>（故に）浄土門</p>	<p>聖道門 智力 + 感情</p> <p> 感情 + 智力</p> <p> 聖道門</p>	<p>第三</p> <p>（故に）浄土門</p>	<p>聖道門 道理 + 啓示</p> <p> 啓示 + 道理</p> <p> 聖道門</p>
--------------------------	---	--------------------------	---	--------------------------	---

こうして、西洋哲学・仏教を通じて、中道をもってその本質として綜合する一大思想大系を樹立しているのである。

第六節 円了の評價

一 宮本正尊

故東大教授・東洋大学講師宮本正尊博士の御尊父実成師は、兄の死により寺の跡を継ぐことになった。実成師は「東洋大学（当時、哲学館大学）出身の兄影幽が東京大病院で病死したため、陸軍教導団をでて軍職にあつ

たのを退き、東洋大学学長井上円了先生の書生をしながら卒業」(『宮本正尊博士の世界』略歴)という、東洋大学・井上円了と深い関係にあった。但し、東洋大学の卒業生名簿には記載されていない。博士も哲学館初代の教員の一である清沢満之の思想的影響を受けて医学から仏教学に転じ、同様に哲学館初代の教師の一人である村上專精の弟子であった。しかもその学問は中道思想を軸として展開され、中道と涅槃に仏教の本質を見ていった。ところがその著『明治仏教の思潮―井上円了の事績』(佼成出版社、昭和五十年)には、「第六章井上円了、その思想その事業」を設けて、約七十頁に及び詳細に円了の事績を紹介しながらその中道思想に触れることなく、僅かに

円了が英国で感得したものは、英国民が實際生活のモットーとしている「ゴールドン・ミーニング」“golden mean”であったのである。釈尊の中道・中国の中庸に通ずるものである。円了がこうした人類の秘義に徹して帰朝したことは、喜ぶべきことであり、東洋大学精神の真髄には、つきりした核ができたといつてよい。要は、円了のこの会得を後代の若手たちが、いかに拈花微笑するかにかかっている。(二四四頁)

というに止っているのには、むしろ驚かされる。

二 池田英俊

池田英俊氏の『明治の新仏教運動』(吉川弘文館、昭和五十一年十二月)は、六章十八節に分かつて明治時代の仏教についての包括的叙述を試みた著作であり、この「第五章仏教の哲学的形成と破邪顕正運動」の「第一節井上円了の破邪顕正運動」として約二十頁にわたって井上円了について紹介している。その第一を「啓蒙活動の歴史的意義」として「井上円了(安政五―大正八)は国粹主義の勃興期に仏教の哲学的形成を目ざして活躍した二十年代の代表的な仏教啓蒙家の一人であった」(二二七頁)と冒頭に仏教啓蒙家と規定し、「仏法の真理と哲学的

真理との合一に顕正観を求めている」(二二八頁)と顕正の意義を認めている。そこで、仏法の真理と哲学的真理との合一をいかなる点に認めていったかが問題になるが、この後は池田氏は井上の業績の紹介を続けていくばかりで、中道・不可思議なる空・真如即ち真怪にその根源を求めて合一を果たしている点には何ら触れていない。円了の思想の本質を捉えることはできなかった、と評すべきであろう。

三 高坂正顕

西洋哲学者の評価を見ると、高坂正顕氏の『明治思想史』(昭和三十年初版、京都哲学撰書第一巻、一九九九年初版、燈影舎)には「第四章一八九〇年より一九〇〇年に至る」の第二節の一として「両井上と雪嶺」の項に簡単に触れられている。井上哲次郎・井上円了・三宅雪嶺に共通する態度として、「彼らの恩索は学的な哲学というには未だ遠かったのである。そこには確かに一種の形而上的気分は見られる。」その論述は、論証というよりは描写であり、論理的な分析や証明ではなくして、美辞麗句をつらねた比喻であり、東西哲学の総合といっても、その西洋哲学の理解そのものが極めてお粗末であったと言わざるを得ない。」(二六五頁)と評する、この点は認めるを得ないであろう。ただ、西洋哲学理解の草分け的な時代であったという点は考慮すべきであろう。むしろ英語等での講義によって西洋哲学のある程度の理解に達し、以後の哲学研究の基礎をなしていった積極的な面をも同時に認めるべきなのではないかと思われる。

井上円了の特色として、一、時代とともに動いていた、二、キリスト教の天帝特造説と耶蘇昇天説あきたに懐らなかつた、三、本来の傾向が天台などの理の立場であったため、ヘーゲルの汎論理主義に心を惹かれた、という三点をあげる。このような性格は認められるにしても、たとえブリミティブな論であっても、円了の中道に東西哲学の窮理を見出す点の紹介と論評を欠いては、その思想の本質を捉えての議論とはいえないと思う。

四 船山信一

これに対して船山信一氏の『明治哲学史研究』（昭和三十四年初版、こぶし書房『船山信一著作集』第六卷、一九九九年九月）に、本篇の最初の「明治哲学における現象即實在論の発展」の「井上円了の現象即實在論」として二十七頁にわたる論述を、井上哲次郎・清沢満之・三宅雪嶺より前に紹介し、その後も「井上円了のキリスト教批判」「井上円了の無神論」「井上円了をめぐる唯物論論争」「井上円了のキリスト教批判における進化論の理解」「井上円了における進化論の理解」と、その他、円了思想の多くの面に触れて論述している。

船山氏は明治哲学を五期に分ち、第一期実証主義の移植、第二期觀念論と唯物論の分化、第三期日本型觀念論の確立、第四期哲学啓蒙家、第五期日本型觀念論の大成、としており、その第二期に「井上円了の仏教哲学もドイツ哲学なしには考えられない」（『船山信一著作集』六卷、三二頁）伝統的思想への反省の項で「後者（仏教への反省）を代表するものが井上円了」（同書三二頁）、「仏教の立場に立ってただキリスト教だけを批判した」（同書、三三頁）、西洋哲学史への関心、と多くの面を紹介し、第三期においても「井上円了などの仏教的唯心論も心即物という論理によって実証主義を含んでいる」（同書三七頁）、「日本哲学の国権主義化がどのように強く推し進められたかを示す事件に……哲学館において中島徳蔵が学生に課した倫理学の試験問題に対する解答が国民道徳に反するとして文部官僚に糾弾された事件」（同書三八頁）を挙げている。第四期にも関説されているが、ほぼ第二・三期の学者としている。そして『哲学一夕話』を西田幾多郎の『善の研究』にも匹敵する書物とし、体系的哲学者と位置づけていて、最も正統な評価を下している著者であると考えられる。但し、中道による統一的哲学者の内容は見過されている。

以上代表的な四名の評価を見てきたが、円了に対する評価が定まっているとはいえない点がある。

第七節 結—今後の課題

本稿を書きながら、多くの疑問を持たざるを得なかった。思想的な面でいえば、統一的な体系的哲学者という面と啓蒙思想家という面と両面を持ちながら、啓蒙思想家としての面の方が多くの人々に見られているのではないだろうか。

体系的思想家としてもその研究の課題が多く残されているように思われる。第一は中道の思想が仏教でいえば真如でありながら、中国の太極・無名真宰・西洋哲学の本質・自覚・絶対理想・不可知的と古今東西にわたる哲理に通ずるという時、これらの思想との共通点と相違点を検討することによって、円了の思想の特質を知ることができるのではないだろうか。また、妖怪学では、仏教のいう不可思議を真怪と名づけて、これは人間の思惟・表現能力を超えているもので、思惟することもできず、言葉でも表現することもできないが、その他のことは思惟の範囲内であるという時、この真怪と重重無尽の一如との関連が明示されていないように思われる。

啓蒙思想家としての面を見ても護国愛理を標榜する時、哲学館建設の頃は愛理に基づく国家の近代化を目標としていながら、実際に講演活動を行うようになると、その課題には明治の国家神道の樹立を目論む政府の意向に沿う題目が多く取り上げられ、政府の意図に沿うものとなつていくように見える。この間に思想的転換が行われ、護国は護国、愛理は愛理という、真宗の真俗二諦論（仏法は真諦であり、王法は俗諦である）に類する立場に変化していったのではないか。『哲学新案』の序文には、神経衰弱にかかり、講演旅行がそれをいやすことになつたと記しているが、この神経衰弱の原因は何であつたか、一つの思想的転回の悩みだったのでないか、等の疑問を持たざるを得なかった。これらの疑問の解明は、そのまま明治思想史の解明にもつながるものであろう。円了をめぐる残された問題はまだまだ多いのである。

〔編者注〕 本稿は、『井上円了選集』第二二卷（東洋大学、二〇〇三年三月発行）の「解説」を再録・加筆したものである。